

零歳児が最も頭を使っている

人間が物事を考えたり、判断し、意志を決定するのは、大脳の神経細胞の働きによるものです。この細胞は、生まれた時、百四十億個ほどあって、他の細胞と違って新陳代謝することなく、死ぬまで一個もふえませんが、それどころか死滅して減少する一方なのです。

生まれた直後の神経細胞は、日を追って枝のような神経繊維を伸ばし、これが他の細胞と連絡することにより、全休としての頭の働きが出来るようにしていくのです。

神経細胞は、コンピューターのトランジスターみたいなものですが、生まれたばかりの時には、他の細胞との連絡がなく、言わばまだ配線されない状態、部品だけの状態にあります。ところが生後三年もすると、主要な配線はほとんど完成され、一生かかって行うものの六、七〇パーセントまでが、この期間に出来上がってしまいます。そして、この配線は、一度出来上がると、それを別の配線に変えることが困難で、それがカマラの努力(狼の配線を人間の配線に変える)が実らなかった理由です。

乳児が五官を通じて大脳の神経細胞で受けとめる外界の刺激は大変なものです。すべて初体験であり、それをどのように処理するかは、一国の首相が国政を処理するよりもずっと困難なものがあるのではないかと思います。

目覚めている時の大脳の活動は、大人のその数倍、数十倍に当たるでしょう。だから、大脳の疲労も甚しく、目覚めているかと思うと、すぐに眠ってしまうのだと思います。

乳幼児期の初体験の多いことから考えれば、乳幼児ほど大脳を使う者はないのではないかと私は思っています。最も大脳を使う者が最も睡眠を必要とするのは当然です。また、最も大脳を使うので、大脳の発達も最も発達し、神経細胞の配線も最も発達するのだ、と思います。